様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４４１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３０４

研究課題名（和文）万葉研究における学際的共有化を推進するための方法論の構築

研究課題名（英文）Construction of the methodology to promote the interdisciplinary sharing in Man'yo research

研究代表者
竹本　晃（TAKEMOTO, Akira）

大阪大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：６０６４７８３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、万葉研究における上代文学・古代史学・考古学の学際的共有化を目指して、共通の土台作りのための方法論の構築を目指したものである。研究材料としては、『万葉集』の巻第3・4を対象とし（巻第1・2の補遺も）、『万葉集』の歌一首ごとにおける参照文献（主に発掘調査報告書）と歌に関連する木簡の情報を組み込み、かつ発掘調査報告書をどのように解釈すればよいかという考察過程を盛り込んだ解説を付し、成果報告書1冊を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『万葉集』の学際的研究を目指す本課題は、他分野の考察過程がわからずに無批判で引用してしまいかねない現在の研究状況を克服するために、個人の解釈を取り除いた客観的な情報（ここでは発掘調査報告書）をまずは共有し、そのうえで分野の異なる研究者同士が議論できるような学術的環境を作ることを目指して進めてきた。またこのことは、一般の人々にも当てはまる。万葉歌一首ごとに文献目録を配しているため、知りたい箇所のみを見ることができ、そこには平易な解説を付しているので、一般の人々でも容易に使うことができる。誰でも手に取ることができるよう各都道府県立図書館に成果報告書を配布した。

研究成果の概要（英文）：This research aims to build a methodology for building a common foundation, for sharing in ancient literature, ancient history, and archaeology of Man'yo reserch.
Covers Volumes 3 and 4 (also addendums to Volumes 1 and 2), incorporates references (mainly excavation reports) and information on mokkan related to each poem in the Man'yoshu, and I have compiled the result report, with a commentary on how to interpret the excavation report.

研究分野：日本文学

キーワード：万葉　木簡　出土文字資料　都城

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

『万葉集』には、歌のみならず、歴史的な事柄や詠まれた場所を示す題詞や左注が付されており、本来ならば分野を超えた議論が不可欠なはずである。ところが、『万葉集』の研究は、歌ゆえに上代文学からの考察が中心となっており、古代史学や考古学の立場からいくら学説を提唱しても、あくまでそれらは他分野の成果としてしか受け止められない。つまり、上代文学の立場からの考察でなければ、万葉研究における共通の議論になりにくいというのが現状である。

そこで、同じ歌について、分野の異なる研究者たちが公平に解釈の議論を深められるように、考古学から判明した客観的な事実を共通の土台とする、上代文学者のための支援ツールとして、歌一首ごとの学際的文献目録（平成 27 年度～29 年度基盤研究(C)（一般）『万葉研究の共有化を目指した学際的文献目録の作成』（15K02220））を作ることとなった（当時最終年度で年度末に刊行。以下、「前研究課題」と呼ぶ）。

こうした学際的文献目録が浸透するには時間がかかることもあり、作成途中に学際的文献目録に基づいた論考を蓄積してきた。しかしながら、あまり先走ってしまうと専論になるおそれもあり、せっかくの学際的文献目録が学術的な意味をなさなくなってしまう。やはり学際的な研究を目指すならば、研究者が公平に論を展開できるような環境づくりを目指さなければならない。それには現状の支援ツール（学際的文献目録）のみでは不十分であると感じていた。

一方で、研究材料に着目すると、飛鳥・藤原地域におけるここ十数年の発掘調査によって、万葉歌に関わる各天皇の宮殿遺構が特定され、同時に木簡も数万点規模で出土しているにもかかわらず、その成果が上代文学側に十分伝わっていなかったという事実がある。それは、やはり上代文学の立場から考古学の成果を批評するような研究が皆無であることが大きな原因であると言える。一つの歌について、詠まれた地域に関する発掘調査成果が存在するならば、その報告書をもとに、歌の解釈について複数の分野で議論を深めるべき必要性を感じる。しかし、現状では一部の国語学者を除けば、ほとんどそうした研究材料が用いられないまま現在に至っている。

２．研究の目的

上代文学者が無理なく古代史学や考古学の分野を援用するには、支援ツール（歌に関係する発掘調査報告書の文献目録）に加えて、その用い方、いわば方法論が不可欠となってくる。そこまで提示して初めて共通の議論がなされるものと認識し始めた。研究代表者は、これまで個別の論考において考察方法を示してきたつもりであったが、本課題研究を機会に、支援ツールを土台にした体系的な方法論の構築を目指す。それにより、研究者の年齢や分野に左右されず、同じ土俵で議論ができるような学術的環境をつくりたいと考えている。

３．研究の方法

以下の３つの方法で行ってきた。

(1)『万葉集』巻第３・４の支援ツール（歌に関係する発掘調査報告書の文献目録）の作成

『万葉集』の注釈書類は、新しいものでも刊行からすでに十数年が過ぎている。その間も発掘調査成果は毎年のように出されており、万葉歌の明らかな解釈矛盾も目立ってきている。そこで、新たに判明した発掘調査成果を万葉研究に盛り込むために、歌の詠まれた場所に関係する発掘調査報告書を集め、上代文学側に広く提示することを目指す。見せ方として、従来の解釈を更新しやすいように、歌一首ごとに対応させた発掘調査報告書目録を作る。この作業は、前研究課題の続編の位置づけになる。

(2)万葉歌一首ごとの出土木簡との関連調査

出土木簡は、出土地とは関係なく、語句から関連性を探ることのできる生の一次史料である。木簡のそうした性格に注目し、歌にみえる人物名・物品名・地名などと関係する木簡をまずは抽出する。そして、関連する木簡の報告書を検討・収集する一方で、上記の(1)の情報を組み込んだ、万葉歌一首ごとの目録作りを目指す。この作業も、前研究課題の続編の位置づけになる。

(3)万葉歌再解釈のための方法論の構築

　上記の(1)(2)において、発掘調査報告書や出土木簡の情報を歌一首ごとにまとめたうえで、出土遺構と木簡の考察を加える。具体的には、出土遺構の見方や、出土遺構と関連させた木簡の読み取り方についての手続き、言い換えると、歌の再解釈に至るまでのプロセスの提示を目指す。考古学的な手法を用いた出土遺構の分析は、今すぐには上代文学者には求められない。しかし、遺構の解釈がどのように導かれているかを提示すれば、その成果を用いることは難しくない。木簡の解釈についても同様で、語句内容のみを見る前に、出土した遺構の解釈を丁寧に提示すれば、書かれている文字がなぜそのように報告書で解釈されたかを知ることができる。このようにして学際的に議論するための共通の土台をつくり、歌の再解釈に臨む。

４．研究成果

(1)　万葉歌を直接対象とした論考として、「大津皇子関係歌の形成と伊勢下向」と「高橋虫麻呂の桜花の歌の創作」を発表した。大津皇子関係歌については、一連の歌群が謀反事件とからめて仮託歌として理解されることが多かったところ、大津皇子と石川郎女・草壁皇子などの関係を見直し、時系列的に実態をあらわしているものとみなせた。高橋虫麻呂の桜花群については、歌群の時期が天平４年か６年かで論争となっていたところ、後期難波宮造営時における藤原宇合と高橋虫麻呂との関係を見直し、神亀年間に位置づけた。いずれも皇族・貴族の家政機関のあり方から考察し直したものである。なお、斎宮における大津皇子と大伯皇女の贈答は、大津皇子が直接斎宮に赴いたのではなく、家政機関の帳内を介した書簡のやり取りであったものと推定している。今後はそのような形での解釈が他の歌に敷衍できるかもしれない。

(2)　そのほか細かい知見としては、成果報告書（平成 30～令和 4 年度科学研究費助成事業 基盤研究(Ｃ)研究成果報告書『万葉研究における学際的共有化を推進するための方法論の構築』大阪大谷大学、2023/3）の各歌ごとの解説に盛り込んだ。たとえば、２８７番歌の「石上卿」が麻呂か乙麻呂かとか、３２９・３３０番歌の大伴四綱の所属を絞り込んだり、深江北町遺跡から出土した「咒願師」と書かれた木簡から、咒願したという僧通観（３２７番歌）との関係性と当該歌の内容から、咒願という行為は少なくとも大阪湾岸では広く行われていた可能性などを指摘した。藤原不比等邸の山池などを詠んだ３７８番歌では、これまで法華寺阿弥陀浄土院の遺構と関連づけがなされておらず、歌の内容と遺構とを関連させれば、阿弥陀浄土院の下層遺構と言われているものは、阿弥陀浄土院の庭園ではなく不比等邸の年季の入った池や水草を指すものと思われる。

(3)　新しい発掘調査の成果として、今後の万葉研究に盛り込むべき情報も多々提示した。近隣の発掘調査が進んでいる水島や磐余池推定地、そして万葉に限らず古代史・考古学の間でも新発見の際立つ豊前地域や、年魚市潟を考えるうえで重要な年々更新される海岸線の推定をはじめ、万葉研究者が見なければならない他分野の成果に解説を加えた。そのなかには恭仁宮なども含まれ、逆に情報を知らないと大きな誤りをしてしまう可能性さえある。

(4)　万葉研究の注釈書や論文で、これまでほとんど取り上げられてこなかった関連遺構も思ったより多く見つけることができた。宮殿遺構で言えば、難波宮が複雑な変遷をたどることは知られているはずだが、それぞれの時期にどのような構造をしていたのかや新しい情報など、万葉研究ではまったく考慮に入れられていなかった。今回の成果報告書では、前研究課題の補遺も含めて煩雑にならない程度に解説を施した。離宮・行宮である竹原井は、1980 年代に発掘が行われたのにもかかわらず、いまだに浸透していないので、わかりやすい図録を提示した。畿内から離れると、「真野の榛原」の一般的な推定地付近の御蔵遺跡や、伊予の道後温泉付近の同時代の岩崎遺跡などがあるものの、万葉研究ではまったく知られていない。その遺跡そのものが歌の舞台であるかはともかくとして、近接地であるから何らかの関係はあるとみてよい。また、意外な点では、筑紫観世音寺の中心伽藍の外側には奈良時代の遺構が希薄であることや、「角鹿塩」などの敦賀地域の同時代の製塩遺構が見つかっていないことなどもあげられる。万葉研究では、勝手なイメージで語られる部分も多いため、こうした事例も新たな知見として認識してもらいたい。

(5)　他分野を参照するさいに注意すべき事柄もある。これまでよく引用されてきた考古学や古代史研究の解釈に危ういものが含まれていることも、本成果報告書が語りたい部分である。吉野宮の復元は最たるもので、復元模型が一人歩きし、知らずに万葉研究者が無批判に使用してしまっている。援用の仕方として、考古学や古代史の研究者の論文を引用するのは悪くはないが、実際の報告書とは内容が変えられているものもある。今回の対象範囲で言うなら、三河の「二見の道」が典型的な事例で、発掘調査報告書と個人の論文とで見解が異なっている。さらには、発掘調査報告書を読むさいには、事実関係と解釈の部分を分けて考えねばならないことも重要である。そこまで万葉研究者には求められないので、本成果報告書ではそれらをどのように捉えるべきかという客観的な解説を加えている。発掘調査報告書のなかには、得名津推定地の遠里小野遺跡のように、発掘調査報告書間で見解の異なるものもみられるので、安易な引用は控えるべきであろう。そのような時は本成果報告書を参照されたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 竹本晃	４．巻 56
２．論文標題 大学における世界遺産教育の方法試案	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大阪大谷大学紀要	６．最初と最後の頁 131～146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹本晃	４．巻 21
２．論文標題 志羅山遺跡出土の経石埋納関係木簡	５．発行年 2021年
３．雑誌名 志学台考古	６．最初と最後の頁 1～6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹本晃	４．巻 -
２．論文標題 奈良時代の基礎知識―由義宮と道鏡の理解のために―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 八尾市立歴史民俗資料館編『奈良時代を学ぼう！ なぜ由義寺が建てられたのか』	６．最初と最後の頁 6～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 梯信暁,竹本晃,苫名悠,馬部隆弘	４．巻 55
２．論文標題 大阪大谷大学図書館所蔵史料の紹介	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大阪大谷大学紀要	６．最初と最後の頁 1～19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹本晃	4．巻 20
2．論文標題 高橋虫麻呂の桜花の歌の創作	5．発行年 2020年
3．雑誌名 大阪大谷大学歴史文化研究	6．最初と最後の頁 1～9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹本晃	4．巻 -
2．論文標題 『新撰姓氏録』における氏の系譜構造	5．発行年 2019年
3．雑誌名 篠川賢編『日本古代の氏と系譜』雄山閣	6．最初と最後の頁 107～123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹本晃	4．巻 19
2．論文標題 大津皇子関係歌の形成と伊勢下向	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大阪大谷大学歴史文化研究	6．最初と最後の頁 20～33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 竹本晃
2．発表標題 古代における境界―万葉集を中心に―
3．学会等名 大阪歴史懇談会
4．発表年 2022年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 厩戸皇子の人物像
３．学会等名 八尾市立歴史民俗資料館 資料館歴史講座
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 世界遺産の何を教えるのか
３．学会等名 大阪大谷大学歴史文化学科公開講座
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 大和での戦線
３．学会等名 斎宮歴史博物館・斎宮歴史博物館友の会共催 古典文学講座 『日本書紀』壬申紀をたどる第6回
４．発表年 2020年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 戦線の大要
３．学会等名 斎宮歴史博物館・斎宮歴史博物館友の会共催 古典文学講座 『日本書紀』壬申紀をたどる第5回
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 乱の発覚から攻防前夜まで
３．学会等名 斎宮歴史博物館・斎宮歴史博物館友の会共催 古典文学講座 『日本書紀』壬申紀をたどる第4回
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 壬申の乱勃発2
３．学会等名 斎宮歴史博物館・斎宮歴史博物館友の会共催 古典文学講座 『日本書紀』壬申紀をたどる第3回
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 壬申の乱勃発1
３．学会等名 斎宮歴史博物館・斎宮歴史博物館友の会共催 古典文学講座 『日本書紀』壬申紀をたどる第2回
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 古代の境界いろいろ
３．学会等名 大阪大谷大学文学部歴史文化学科公開講座「境界の古代学」
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 壬申の乱に至るまで
３．学会等名 斎宮歴史博物館・斎宮歴史博物館友の会共催 古典文学講座 『日本書紀』壬申紀をたどる第1回
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 平城・難波の往還路で見たもの―大和川沿いの景色―
３．学会等名 かしわらボランティアガイド養成講座「シンポジウム 龍田古道往来」
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹本晃
２．発表標題 住吉仲皇子の反乱―淡路・河内・大和―
３．学会等名 河内長野市民大学くろまろ塾本部講座「記紀万葉の大阪」
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 竹本晃	４．発行年 2023年
２．出版社 大阪大谷大学	５．総ページ数 158
３．書名 万葉研究における学際的共有化を推進するための方法論の構築（18K00304）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

竹本晃「書評 大橋信弥『古代の地域支配と渡来人』」『日本史研究』第713号、2022年1月、pp64-71

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関